

## バリ島における観光と雇用、その課題

Tourism, Employment and Its Challenges in Bali

齊 藤 功 高\*

Yoshitaka Saito

### Abstract

15 年前にバリ島で感じた私の疑問が今のバリ島ではどのようなになっているのかを、バリ島における観光の発展とそれに伴う雇用の改善の各種データとバリ日本人会における万亀子イスカンダール氏のお話を基に分析し、同時に、観光の発展に潜む現在の問題点を挙げた。

内容としては、1. バリ島観光の歴史、2. バリ島観光の今と課題、3. バリ島の魅力とは、4. バリ島観光の今後、という章からなっている。この分析により、バリ島における観光業の発展が、多くの住民、とりわけ、若年層に雇用の機会を与え、外資を呼び込んでいることが理解できた。日本企業もバリ島観光に参入していることも分かった。しかし、観光業の発展が問題を引き起こしていることも事実であり、観光の発展と新たに出てきた問題をどう調整していくかが今後の課題として残っている。

### はじめに

約 15 年ぶりにバリ島を訪れた。当時の印象は、町のいたるところで、祭りが行われていたこと、街の歩道のあちらこちらで、男性が手拭ぶたさで腰かけている姿だった。しかし、今回は、街にはぶらぶらしている人は見かけず、まるで当時の印象とは異なっていた。これは何だろう。どうしてこのような変化があったのだろうと疑問がわいた。

そこで、バリ島日本人会にお邪魔してお話をお聞きすることにした。幸い、快く私の要望を引き受けていただき、10 名くらいの在住日本人の方が集まってくれた。中には、退職してバリ島に住んでおられる方も来ていただいていた。

た。

日本人会には、日本語学校が併設されていて、放課後 4 時ごろから生徒さんが日本語や日本文化を学びに来るという。約 280 名の生徒さんがいるというが、その 8 割は現地の方と結婚してできたお子さんであるという。

日本人会では、顧問兼最高相談役でラムツアーズ代表取締役社長の万亀子イスカンダール氏のバリ島と観光についてのお話をお聞きしながら、バリ島についての見識を深めることができた。

以下、バリ島の観光について現地情報と万亀子イスカンダール氏のお話を基に、バリ島観光の歴史、バリ島観光の今日、観光業と雇用機会、そして問題点等を中心に述べていく。

\* 文教大学国際学部教授

## 1. バリ島観光の歴史

まず、バリ島が今日のように観光で脚光を浴びるようになったのは、いつ頃なのか、それは誰によってもたらされたのか。

17世紀にオランダ東インド会社をはじめとしたヨーロッパ勢力がバリ島に進出した。しかし、特別な産物のないバリ島は植民地の価値はないと判断され、植民地化は進まなかった。ところが、オランダは、西欧各国の植民地獲得の流れに乗り、1908年にバリ島を完全に植民地とした。その後バリ島は1942年までオランダの植民地（東インド会社）であった。バリ島がオランダの植民地となったとはいえ、バリ島の王侯貴族らによるププタン（無抵抗の大量自決）により、オランダは国際的な非難を浴びた結果、オランダ植民地政府は現地伝統文化を保護することにした。これが、バリ島を「最後の楽園」として世界に知られる基になった。

上記の関係から、1920年代には、ヨーロッパ人がバリ島北部のシンガラジャに来るようになり、サヌアビーチを見つけた。1932年にはチャールズ・チャップリンもバリ島を訪れている。その後、1930年代に開催されたパリ（1937年）とニューヨーク（1939年）の万国博覧会で初めて「バリ島」の名前が世界に知られることとなった。ビーチの名前にDreamlandなどの英語名が付いているのはヨーロッパ人が最初にビーチを見つけたからである。

1963年、日本からの戦争賠償金により、サヌールに10階建て（400室）のバリ・ビーチ・ホテル Bali Beach Hotel（現在の Inna Grand Bali Beach Hotel）が建設され、1966年に開業した。9ホールのゴルフ場及びボーリング場も併設していた。これは、バリ島初の高層ホテルであるが、その後、高さ規制により4階建て

までになったので今では貴重な建造物である。1967年にングラ・ライ空港が開港すると、サヌールがバリ島へのマス・ツーリズムの最初のメッカとなった。

1972年にBTDC（バリ島観光開発局）が政府主導型の観光開発のブループリントを完成させ、政府負担でインフラを整備し、人材供給の為の観光学校を設立し、法の整備を進めたが、このブループリントはオイルショックによってとん挫した。しかし、1982年に、ヌサドア開発のために空港から全長35キロのバイパス工事が世界銀行の援助で日本の熊谷組によって完成した。1972年の計画から10年かかった。

1983年には、ガルーダ・インドネシア航空によってヌサドアビーチホテルが完成した。万亀子イスカンダール氏によると、当時、ヌサドアにはインドネシアが資金を出して作ったヌサドアビーチホテルしかなく、そこで、インドネシア政府はヌサドアでのホテル誘致に関して、インフラは全部政府が行う、土地も50年間貸すという条件を外国資本に提示したが、誰も見向きしなかったという。

また、当時、JALもホテル誘致を求められ、今のウエスティンリゾートヌサドアバリのところはどうかと政府から打診されたが、JALは、ヌサドアビーチホテルの隣、一番南のはずれ、今のアイオニアホテルのところがいいと言った<sup>1</sup>。そして、JALは、ホテルとともにゴルフ場も一緒に開発したいとし、計画が進んでいたが、1985年8月、御巢鷹山での日航機墜落事故があったため、JALは海外事業から撤退した。その結果、バリ島の運命が変わったとイスカンダール氏は言う。

そのような中、1986年東京サミットの折、レーガン米大統領をバリ島に呼ぶことができ、それにより、バリ島が有名になった。当時の観光大臣がアメリカに行き、サミットの折に、バ

<sup>1</sup> 万亀子イスカンダール氏による。

リ島に寄ってほしいと要望し実現したものである<sup>2</sup>。

その後、ヒルトン、シラトン、グランドハイアットなど米国系のホテルが誘致された。そして、1992年、ヒルトンホテル完成でヌサドア地区が完成した。現在、ヒルトンホテルはローカルのホテルになっている<sup>3</sup>。

2013年のAPEC開催に伴い、新国際線空港ビル建設<sup>4</sup>、渋滞地区のアンダーパス工事、水道管敷設、海上高速有料道路（12.7 km）の建設という4大工事が完成した。海上高速有料道路は、10キロが海上部分であり、この高速道路により空港からヌサドアやウブドなどへのアクセスが便利になった。

また、近年、バリ島での国内外の大小の会議が増えている。それは、ジャカルタで開催するには交通渋滞が激しいためであり、また、バリ島には交通渋滞がなく、大型の国際会議でも十分に開催できる大型宿泊施設が十分にあるためである。2018年にはIMF国際会議（10月）も開催された。

## 2. バリ島観光の今と課題

### （1）観光客から見るバリ島の発展

バリ島観光客数のデータによると、バリ島を訪れた観光客数は、2014年は3,766,638人であったが、2018年には、6,070,473人となり、実に約62%もの増加となっている。注目すべきは2017年までは継続してオーストラリアの観光客が1位であったが、2017年から中国人観光客が1位となったことである。実に約72%も増加している。これはのちに見るが、中国からの直行便が増えたことと、ツアー料金の低廉が関係している。また、近年、中国人観光客以外にも、インド人、ロシア人、インドネシアの富裕層が増加している。インドネシア人観光客は、2013年に433,800人だったのが、2017年には2,304,300人となった。実に約5.3倍の伸び率であり、年平均14.64%の割合で伸びている<sup>5</sup>。

日本人の観光客はと言えば、一貫して20万人台であり、2018年にはイギリス人観光客数にも負けている。この原因の大きな1つは、JALやANAのような日本の航空会社の直行便が飛んでいないことによると考えられる<sup>6</sup>。代わりに、日本では、ビーチリゾートとしてハ

バリ島観光客数

国／年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
中国	585,922	688,469	975,152	1,356,412	1,361,512（人）
オーストラリア	988,786	966,869	1,117,933	1,062,039	1,169,215（人）
インド	88,049	119,304	180,770	264,516	353,896（人）
イギリス	127,013	167,628	118,928	240,633	270,789（人）
日本	217,159	228,185	232,151	249,399	261,666（人）
国の合計	3,766,638	4,001,835	4,927,937	5,697,739	6,070,473（人）
前年比	14.89%	6.24%	23.14%	15.62%	6.54%

Badan Pusat Statistik Provinsi Bali (Statistics of Bali Province)

<sup>2</sup> 同上

<sup>3</sup> 同上

<sup>4</sup> バリ島北部に新たな空港が建設中であり、バリ島2つ目の空港になる予定である。

<sup>5</sup> Badan Pusat Statistik Provinsi Bali (Statistics of Bali Province)

<sup>6</sup> 万亀子イスカンダール氏の指摘による。

ワイヤグアムと言ったところが人気であり、観光客がそちらに奪われている<sup>7</sup>。

このような観光客の増加はバリ島経済をけん引しており、雇用拡大に貢献している。しかし、急激な観光客の増加は、バリ島にマイナス面も与えていることは事実である。

## (2) 労働者の雇用機会を提供する観光業

バリ島の産業別就業人口の推移をみると、2010年は、農業従事者は全体の約30.9%、観光業（商取引、ホテル、レストランを含む）では、約26.2%であったが、2011年には、農業は約25.2%、観光業が約27.1%となり、観光業の従事者が農業従事者を上回った。2014年は、農業約24%、観光業27.6%となり<sup>8</sup>、バリ島の就業人口は完全に農業から観光業に移っている。

ホテル数でみると、1981年は星付きホテル23軒、星なしホテル399軒、計422軒、1986年は、星付きホテル36軒、星なしホテル954軒、計990軒、1996年は、星付きホテル122軒、星なしホテル1,045軒、計1,132軒であったが<sup>9</sup>、その後、星付きホテルは、2011年には199軒になり、2018年には511軒になった。年平均20.47%で伸びている。一方、星なしホテルも2018年には4,323軒あり、2011年から2018年にかけて増加傾向にある。

部屋数でみると、星付きホテルは2018年には52,927部屋であり<sup>10</sup>、星なしホテルは56,442部屋であった<sup>11</sup>。部屋の占有率は2016年61.34%、2017年64.24%であり、いずれも

60%代をキープしている。

また、ホテルにおける1日の宿泊客数をみると、2016年には26,632人に達し、2010年から2016年までは増加傾向にある。ベッド数では、2003年に59,432ベッドだったのが、2018年には78,801ベッドとなり、年平均4.55%の増加を示している。

さらに、1施設のホテルで働く人の平均は、2018年は122.6人と減少している<sup>12</sup>。それに対して、ホテル以外の施設で働く労働者数は、2018年の20.6人であり、2011年から2018年では増加傾向にある<sup>13</sup>。ホテルで働く人の数は2011年と比較すると減少しているが、ホテル以外の施設では増加しており、上記のようにホテルやベッド数が増加しているため雇用者は全体として増えている。

このように、バリ島における観光業の象徴であるホテルが増加傾向にあることは、バリ島における観光業の興隆を裏付けるものである。

次に、バリ島のGDPに占める観光業の貢献はどうなっているのか。

まず、第1次産業のバリ島全体のGDPに占める割合は、2010年に18.38%、2014年には15.89%であった。その中で農業は、2010年には17.17%であったが、2014年には14.64%と減少している。

それに対して、第3次産業は、2010年には65.28%であったが、2014年には68.28%と増加している。観光業も2010年には27.82%であったが、2014年には31.35%と増加している<sup>14</sup>。

雇用人口でみると、第1次産業が、2010年

<sup>7</sup> そのため、万亀子イスカンダール氏は、日本からの観光客の誘致を目的に結成され、現在96社の会員から成っている「バリ・ラサ・サヤン」を代表して、毎年のように日本を訪れてバリ島を宣伝している。

<sup>8</sup> Website of Bali Statistic Central Bureau (2016)

<sup>9</sup> Website of Central Bureau of Bali Statistik (2016), and Website of Bali Tourism Office (2016).

<sup>10</sup> 2003年に37,498部屋だったので、役員14%伸びている。

<sup>11</sup> 2016年に26,588部屋だったので、わずか2年で2.1倍の伸び率を示している。Knoema.com <https://knoema.com/atlas/Indonesia/Bali/topics/Tourism>

<sup>12</sup> 2011年は181.7人だったので、2018年は減少している。

<sup>13</sup> 同上

<sup>14</sup> Website of Central Bureau of Bali Statistic (2016)



に 679,246 人であったが、2014 年には 554,893 人に減少している。農業においても 2010 年は 672,246 人であったが、2014 年には 545,827 人に減少している<sup>15</sup>。

それに対して、第 3 次産業は、2010 年に 1,046,530 人であり、2014 年には、1,178,201 人に増加した。観光業（商取引、ホテル、レストラン）は、2010 年には、571,274 人（全体の 26.24%）であったが、2014 年には、628,585 人（全体の 27.64%）に増加している<sup>16</sup>。

観光業のおかげで貧困率は減少し、失業率も減少した。たとえば、内陸部の首都デンパサールでは失業率は 3.54%であるが、ビーチリゾートを有するバドゥン県（クタ、レギャン、ジンバラ、ヌサドゥアなど）では、0.34%である<sup>17</sup>。

大学卒などの高等教育を受けた若者は、農業に従事しながら、英語やコンピュータスキルが要求される観光業につくケースが多い<sup>18</sup>。

### (3) バリ島の人口構成の変化と軋轢

2000 年にはヒンズー教の人口はバリ島全体の 88.05%だったが、2010 年には、83.45%となり、4.59%減少した<sup>19</sup>。現在は、ジャワ島などからのイスラム教徒の移民労働者が増加している。中でも、バリ島全体では、イスラム教徒は 5.9% (186,613 人) であるのに対して、デンパサール市人口の 14.8% (56,210 人) がイスラム教徒となっている<sup>20</sup>。

これは、インドネシア全体でムスリムの出生率（平均 2.1 ～ 3.2）に比べて、ヒンズーの出生率（1.8 ～ 2.0）が低いこと<sup>21</sup>、近年、他島から仕事などで移住してくるムスリムが増加して

いることによると推測される。

イスラム過激派ジェマ・イスラミアの犯行とされる 2 度の大規模な爆弾テロ事件は、欧米からの裕福な白人系観光客が標的にされたと同時に、ヒンドゥ教徒も標的とされたことから、インドネシアで多数を占めるイスラム教徒とバリ島以外では少数派であるヒンドゥ教徒の軋轢の先駆けであった。現に、インドネシア全土では、イスラム教徒によるヒンドゥ教徒への敵対行為が行われている。

そうはいつても、バリ島での経済成長の恩恵を受けようと、他島から移り住んでくるイスラム教徒やキリスト教徒も多い。ウブドにあるマッサージ店で働く女性（キリスト教徒）も他島から来ていると言っていたが、就業の機会を求めてバリ島にやってきている他島の労働者は多い。

その結果、バリ島では、移民労働者が毎年増加しており、地元労働者と移民との競争が激化している。地元労働者はバリの慣習に則って働くとするが、移民はバリの慣習にとらわれることなく働く。そのため、ほとんどの村では、移民労働者を規制し、移民労働者の比率を決めている。就業者の 30%から 50%までしか移民労働者は働けないため、雇用者にとっては厄介な問題となっている<sup>22</sup>。

また、バリ島では、毎日のように祭りが行われているため、同じ地域出身者だけを雇うと仕事に支障をきたすため、今では、地域の異なる人を雇ったり、宗教の違う労働者を雇ったりして、その弊害を埋め合わせているという<sup>23</sup>。

<sup>15</sup> 同上

<sup>16</sup> 同上

<sup>17</sup> Central bureau of statistics of bali province

<sup>18</sup> Garden of Life <https://www.gardenoflife.com/impacts-tourism-industry/>

<sup>19</sup> 2010BPS badan pusat statistic

<sup>20</sup> 2004 年バリ州統計 (*Bali Dalam Angka*)

<sup>21</sup> Sensus penduduk 2010

<sup>22</sup> Chistimulia Purnama Trimurti, Komalawati, Determinant of Economic Growth in Bali. International Journal of scientific & engineering Reseach, Volume 8 issue 11, November 2017,p.54

<sup>23</sup> 日本人会でのインタビューによる。

#### (4) グラブ Grab の台頭

近年、Grabがバリ島のタクシー業界に参入した。フィリピンと同様、バリ島でもUberが撤退し、Grabが優位を保っている。しかし、現在、Grabと地場のタクシーや旅行者との間で対立が激しくなっている<sup>24</sup>。

一部では地域の取り決めでGrabの利用が禁止されているところもある。Grabの参入で、バリ島の輸送産業全体が過当競争になっていることが背景にある。たとえば、ウルワツ寺院に行くためGrabを利用したが、途中でGrab乗り入れが禁止されていた。ウルワツ寺院まで行ってもらったが、帰りにGrabを呼んだ時、ウルワツ寺院周辺には入れないとの連絡があった。また、ジンバランの一部レストラン街にはGrabの乗り入れを禁止している場所があった。スミニャック地区では地域の慣習でGrabの利用を禁止し、地域内では乗車できないという取り決めがある。ビーチリゾートとして人気の高いサヌール地区などバリ島内のほかの地域でもこうした規制が生まれている。地場の業者を保護する視点も重要ではあるが、外国人が観光しやすい環境を作り上げることも必要であり、規制一辺倒ではバリ島全体が競争に遅れることにもつながりかねないとの指摘がある<sup>25</sup>。

実際、Grabの運転手は比較的若い若者が中心であり、一定程度、若者の労働者をGrabが吸収し、失業率を下けているもの現実である。地元タクシー運転手に比べてGrab運転手は若年層であり、自分の車を利用してGrabで稼いでいる。比較的若い観光客は運賃交渉をしなければならないタクシーより、運賃が決まってい

#### (5) 中国人団体観光客による弊害

中国人観光客の増加を狙い、ガルーダ・インドネシア航空は、中国からの直行便を増加した。従来のバリ島と北京、上海、広州、成都などを結ぶ便の他、西安（陝西省）、鄭州（河南省）を加え、今回の増便でガルーダ・インドネシア航空の中国本土への直行便は週63便となる<sup>26</sup>。

中国人観光客が増加するに伴い、バリ島では最近、島の各地に中国語表記の看板、メニューを備えたレストラン、中国人が経営する土産物屋、旅行代理店、バス会社、ツアーガイドが多くなっている。

中国人観光客がオーストラリア人観光客を上回った2017年から格安ツアーでバリ島に来る中国人団体客が急増した。バリ観光協会や観光業者によると、中国人格安団体ツアーは往復航空券、ホテル5泊分を含めて200万ルピア（約1万6000円）という安さだという<sup>27</sup>。さらに最近では航空券、4泊5日分のホテル代込みで、60万ルピア（約4800円）という超格安のツアーが販売されているという<sup>28</sup>。

こうした超格安ツアーの中国人団体観光客は、ホテル1部屋にエキストラベッドを入れて、大勢の中国人が寝泊まりし、ホテル代を浮かしている。また、中国系旅行代理店が手配した大型観光バスで中国人の通訳ガイドと移動し、食事は中国料理店で中国語のメニューから選んで食べ、土産は中国人が経営する店で買い、中国のクレジットカード「銀聯カード」などで支払う。しかも、中国人経営の土産物店では、インドネシア製品とは無関係な品物を売っているという。このことにより、地元金に落ちず、中国人同士だけが潤う構図が浮き彫りになっている<sup>29</sup>。

<sup>24</sup> 2017/02/20 日経MJ（流通新聞）

<sup>25</sup> 同上

<sup>26</sup> 2018/01/24 日経産業新聞

<sup>27</sup> 「大塚智彦の東南アジア万華鏡」2018/10/24 Japan In-depth

<sup>28</sup> 同上

<sup>29</sup> 同上

また、所かまわず喫煙して吸い殻をポイ捨てしたり、痰や唾を吐いたり、ヒンズーの宗教施設でヒンズー教徒が敬虔な祈りを捧げる隣で大声でしゃべりながらセルフィーを撮影するという中国人団体観光客も問題となっている。

さらに、無資格の中国人通訳、観光ガイド、無許可営業の中国人による土産物屋や土産店、中国人経営のマッサージ店なども問題視されており、州政府や関係機関は法律的に調査してそれ相応の処分をすることも検討するとしている。

このような状況に、バリ州知事は、バリ島にとって中国人観光客の存在の重要性は認めつつ、地元にお金を還元してほしいと注文をつけ、痰や唾を吐き、大声で話すような品の悪い観光客ではなく、『質のいい観光客』に来て欲しい』と言い切った<sup>30</sup>。その結果、2018年月中旬頃から、中国・バリ島間のフライトが減り、中国人観光客数が減っている。万亀子イスカンダール氏は、バリ島の伝統を壊す観光客には来てほしくないという。

## （6）バリ島におけるゴミ問題

バリ島では2017年12月、観光客に人気のいくつかの海岸で「ゴミ緊急事態」が宣言された。2017年には、前年比約16%増の約560万人の外国人観光客が訪れ、その結果、ホテルやレストランでの廃棄物の増加を招き、不法投棄もあった。また、観光客の多くは、使い捨てのプラスチック製品などを島に残していき、浜辺に打ち上げられるごみも多い<sup>31</sup>。地元の環境保護団体の調べでは、バリ島南部だけでも1日240トン以上のゴミが出るという。

バリ島には、インドネシアの他の地域で捨て

られたゴミも流れ着くため、クタなどのビーチでは毎日、700人規模の清掃員と35台のトラックを使い、約100トンのゴミを清掃しているという<sup>32</sup>。観光業は地元社会に経済的な貢献をする一方で、環境へダメージを与えている。

そのため、観光客への課税について検討が進められている。地元紙ジャカルタ・ポストによれば、地元政府は出国の際に外国人観光客に対して10米ドルの課税を行う法案を作成したという。海外からの観光客も約60%は、島の環境保全のためには必要だと答えたという<sup>33</sup>。

## （7）日本企業の参入

星野リゾート（長野県軽井沢町）はバリ島ウブドで宿泊施設「星のやバリ」を開業した。「星のやバリ」は、新しいコンセプトのもと、バリ島を訪れる日本人旅行者などの需要を狙い、大規模な観光開発が進んでいないウブドに進出した<sup>34</sup>。

H.I.S.は、バリ島ングラ・ライ空港近くジンバランに4星の「ウォーターマーク・ホテル・アンド・スパ・バリ」を開業した。同ホテルは、モダンデザインの全室143室を用意し、2つの日本人シェフがプロデュースするレストランにお洒落なカフェ、ホテルスパ、メインプールと夕日の綺麗なルーフトッププール、ジンバランビーチにあるビーチクラブで南国リゾートを満喫できる設備を備えて日本人客を狙っている<sup>35</sup>。

JTBは、バリ島で観光客向けのバス「クラクラバス」を運行している。バリ島初のシャトルバス事業である。大型免税店を起点にホテルが集まるクタやレギャン、観光地のウブドなどを結ぶ7路線を運行する。バリ島への旅行者は

<sup>30</sup> 同上

<sup>31</sup> 私の滞在中はそのような光景を見たことがない。おそらく、地元ボランティアが清掃をしている結果であろう。

<sup>32</sup> 2018/04/08 日本経済新聞

<sup>33</sup> 2019年1月23日CNN

<sup>34</sup> 2017/01/21 日本経済新聞

<sup>35</sup> 2014/04/26 日本経済新聞

増加傾向であるが、公共交通機関が乏しく、観光客の移動手段はタクシーが一般的であることに目を付けた<sup>36</sup>。

運営は、JTB グループがバリ島に設立した現地法人、PT クラクラ・インドネシアが担当する<sup>37</sup>。

### 3. バリ島の魅力とは

万亀子イスカンダール氏によると、バリ島の魅力は以下の13点にあるという<sup>38</sup>。

第1に、宿泊施設が豊富であること。政府公認では、約70,000室あるが、一部では約140,000室ともいわれる。これは、政府非公認の個人経営の宿泊施設があるためである。そのため、既存のホテルなどの施設は客を奪われることとなり、苦慮しているという。

第2に、食べ物が美味しいということ。バリの食事は辛くないし、バリ米がおいしいこともあって、日本人観光客にはあっている。また、世界中の料理が食べられることも魅力の1つである。

第3に、風光明媚な観光地があること。海、アグン山やキンタマーニ高原などの山、渓谷、テガララン・ライステラスなどの水田、星空があり、空気もきれいである。

第4に、歴史的な場所や建造物があること。ウルワツ寺院やタナロット寺院などの数多くの寺院やグヌン・カウイなどの洞窟がある。

第5に、ヒンズー文化に代表される異文化があること。たとえば、舞踊芸術のケチャ、レゴン、パロン・ダンス、憑依舞踊のサンヒャン・ドゥダリ、ガムランやジュゴグ（竹のガムラン）、影絵芝居などがある。

第6に、バリ人の生活そのものが観光になっていること。毎日どこかで宗教儀式が行われて

いる。したがって、バリ人以外には地元を説明できないため、バリ人以外のガイドはおらず、バリ島を知り尽くしていることがガイドには求められる。しかし、最近、バリ島を知らない中国人ガイドが中国人観光客を案内していることには批判がある。

第7に、ゴルフ場（5か所）とサヌール、クタ、ヌサドア、ジンバランなどの有名ビーチがあること。娯楽と保養が一体となって楽しめるため、富裕層を獲得することができる。高級リゾートホテルも続々とできている。

第8に、サービスを提供する労働力が豊富であること。たとえば、STP（国立観光専門学校）や国立観光大学をはじめ、バリ島には合計観光系5校が存在する。ヌサドア開発の時、州政府は当初8軒のホテルを建てる計画を立て、そのための人材を育成するため、ホテル学校を作ったことが発端となり、今ではホテルなどの観光業に携わる人材を輩出している。

第9に、言葉が通じること。日本語のガイドは約1,000人いる。ただし、日本人又は中華系日本語ガイドはいない。また、英語、仏語、オランダ語、ロシア語、中国語等々を話すことができるガイドもいる。

第10に、日本との時差が少ないこと。日本とバリ島の時差は1時間であり、ハワイと異なり、時差ボケすることがない。

第11に、ショッピングが楽しめること。免税店にはブランド品があり、その他に、絵画、銀細工、木彫、石彫、民芸品、織物、雑貨等を買うことができる。

第12に、気候が良いこと。平均気温は28度で、乾季（4—9月）と雨季（12—2月）があるが、台風がない。

第13に、ギャンブル場がないこと。インドネシア政府が禁止している。そのため、ギャン

<sup>36</sup> 2014/03/28 日経産業新聞

<sup>37</sup> 2014/03/27 日本経済新聞

<sup>38</sup> 万亀子イスカンダール氏によるプレゼンテーションから。



ブルに伴う犯罪がない。

万亀子イスカンダール氏によると、バリ島は、ハワイ、サイパン、グアムのビーチリゾートの延長線上にあるのではなく、上記以外の魅力として、いつの時代にもどの国からも、宗教、国籍、民族の差別なく外国人観光客を迎い入れて、観光客が持ち込んだ国際的な多様な文化や感覚（センス）がバリの伝統的な文化と結びつき、より魅力あるものを創造し続けている「躍動のバリ」という点にあるという。

そして、同氏は、バリはこれからも「躍動し続ける」だろうし、国内外から多くの観光客を入れるだけの十分な観光資源とサービス提供の人材が豊富であるという大変希望的な未来があると述べる。また、同氏は、バリは官民一体となった観光開発の成功例であろうと言う。

#### 4. バリ島観光の今後

万亀子イスカンダール氏によると、バリの観光は、老若男女のニーズに合い、超豪華な観光客や節約型観光客の両方のニーズに対応可能であるという。また、個人客のみならず、大型や小型の団体客、たとえば7,000人あるいは8,000人などの特に超大型団体客にも対応できる包容力を持っていると述べる。そして、パッケージツアー、各種旅行手配の幅広さ、Weddingに伴う諸産業、国際会議の開催、長期滞在者の誘致、Villaに代表される個人客への超デラックスの宿泊施設などがそろっているという。

同時に、バリ島のスバック（灌漑用水）システムが世界文化遺産に登録（2012年6月）されたり、世界遺産であるボロブドール・プランバナン寺院への移動の容易さ、バリ島以東の島々、たとえば、ロンボク島、コモド島、スンバ島へも簡単に行くことができるのも強みだという。

ただし、これらの強みを活かすには、バリ島への直行便があることが前提となる。日本人観光客を増やすためには、今、日本からはガルー

ダ・インドネシア航空しか就航していないので、バリ島への日系航空機の誘致が必須であると万亀子イスカンダール氏は強調する。また、同氏は、2010年10月までJALの直行便（成田＆関空）が毎日就航していたが、今はJALが就航しなくなったので（ただし、現在はJAL、ANAとコードシェアをしている）、日本人と現地人とのつながりが少なくなったと言い、是非ともJAL直行便の再開を希望すると述べている。

このように、今後のバリ島は、そのポテンシャルを伸ばしつつ、観光に伴うマイナス面をどう克服するかが問われている。

#### おわりに

ジョコ政権は製造業などとともに観光業を経済の柱とする観光立国政策を推進している。2019年までに外国人観光客の訪問者数を2000万人に伸ばす目標を立てる。その主要な場所はバリ島である。

しかし、ジョコ大統領は「バリのようない観光地を10カ所新たにつくる」と宣言し、観光業でのバリ島への過度な依存からの脱却を目指している。しかし、万亀子イスカンダール氏によると、掛け声だけで実際は進んでおらず、バリ島以外の場所をどのようにして観光地化するかは不透明だと指摘する。世界有数の観光地であるバリ島の存在の大きさを物語っている事例であろう。現に、バリ島は2017年にトリップアドバイザーが選んだ世界の人気観光地ランキングで1位を獲得している。

さて、冒頭で述べた、15年前に見た、手持ちぶたさのバリ島の住民、中でも若者はどこに行っただろうか。どこの産業に吸収されているのだろうか。その答えは、上記で明白である。高等教育を受けた若者が多くなるにつれ、農業につかず、ホテルなどの華々しい産業につく。外国人が多く訪れるホテルで英語力を磨き、ホスピタリティを身に着けて、もう一歩成長する

ために、海外進出を果たす、そのような構図が出来上がっているようである。バリ島のホテルのホスピタリティは日本に引けを取らないほど精練されてきている。

また、観光業に吸収されない若者は、クラブなどの仕事についていることもあり、観光業関連の産業によって、仕事を得ているのである。15年前のバリ島とは異なり、経済成長とともに仕事先が増えているのは事実のようである。

## 謝辞

バリ日本人会に皆さんには、お話をお聞きする機会を設けていただき、大変お世話になりました。ここに感謝申し上げます。

\*この小論は、2019年度個人研究費と国際学部促進費による研究の一部である。